
クラウドザーのボタン

中川蓮蔵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クラウザーのボタン

【Nコード】

N2385BA

【作者名】

中川蓮蔵

【あらすじ】

ボタンを押すだけで苦なく死ぬことができるボタン。それを手にしたものは欲望のままに罪を犯し、追い詰められればボタンを押し、死を選んでいく。

そのボタンの秘密とは？そのボタンを管理する組織の目的とは？

序章

「いたぞ。該当者だ」

黒ずくめのスーツを着た長身の男が、歩道橋の上から見下ろして言った。

髪をボサボサに伸ばした中年の男が後ろを何度も振り返りながら歩道を駆ける。そ男を3人の警察官が怒声を上げながら追いかけていた。この逃走劇を道行く人たちが物珍しそうに眺める。しかし警察から逃げ続ける男を止めようとする一般人はいなかった。

「吉田里人。34歳」

スーツの男が懐から取り出した紙を見ながら言った。

「性犯罪か？」

同じく黒ずくめのスーツを着た男が逃げる吉田を見つめながら聞く。吉田は警察官のひとりに追いつかれ、背中を掴まれていた。

「よく分かったな。未成年者への強姦が7件。そのうち2人を暴行中に殺している」

「まああの手の男がやりそうなことだ。それですであれは吉田の体内に？」

吉田は警察官3人に押さえつけられていた。それでもまるで焦ることもなく、嬉しそうに笑っていた。

「吉田、何がおかしい。観念したか」

警察官のひとりが吉田を押さえつけながら怒鳴る。

それでも吉田は笑うことをやめない。

「いいんだ。俺は。もうやりたいことはしたしな。おまえ等に捕まっていたまるか」吉田はそう言って、懐から黒いボタンのようなものを取り出した。そのボタンを凶器と感じた警察官たちがそれを奪おうとした。吉田は奪われる前にボタンを押した。

その瞬間、吉田の体が脱力し、そのまま崩れ落ちた。

警察官たちが慌てて吉田の体を揺する。しかし吉田の体はびくりと

もしなかった。

「吉田里人、ボタン使用。しかし…」

スーツの男が携帯に話しかけながら吉田を見ていると、吉田の体が動き出した。

一旦は離していた吉田の体を警察官たちが慌てて押さえつける。

「なんでだ？ボタンは押したのに。なんで死んでないんだ？」

吉田は絶叫しながら警察官たちの押さえに抗っていた。

「クラウザーは死亡を拒否した。以上、吉田里人の報告を終える」
携帯をしまい、スーツの男たちはその場を後にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2385ba/>

クラウドのボタン

2012年1月6日00時47分発行